都道府県別賞一等

わたしの将来と生命保険

愛媛県　新居浜市立東中学校　一学年　山林　美貴

「ねぇ、うちって生命保険入っとるん。」

この作文を書くにあたって、素朴な疑問を持ったので、家族の人に聞いてみた。

「当たり前やろ。」

私はこの返事に驚いた。当たり前と答えるくらい、生命保険に加入することが大事なのか、調べてみることにした。

生命保険文化センターの『令和元年度生活保障に関する調査』によると、生命保険に加入している人は、男性では八十一・一％、女性では八十二・九％となっている。約八割の人が加入しているのだ。では、生命保険に加入することで、どのようなよいことがあるのだろうか。

生命保険は、自分と家族の生活を守る大切な備えであり、大勢の人が保険料を負担し、〝もしも〟のことが現実に起きたときに給付を受ける仕組みである。

私は、漠然とだが将来のことを考えている。進学して、大好きなバスケットボールを仲間とともにプレーして、大きな大会で活躍する。なんとなく思い描いている夢だが、現実になればいいなと思い、中学生の今、部活動に励んでいる。ただ、この夢は私の両親が元気で、私の夢を応援してくれることが前提である。この「私の両親が元気」ということが、将来絶対であるとは限らない。私の両親が「生命保険に入るのは当たり前」と答えたのは、ここの理由があるからだと感じた。

母に聞くと、いろいろな理由を話してくれた。私が考えていたこと以上にいろんな理由があった。

まず一つ目は、親に何があっても子どもの将来を保障するためである。私の家には、四人の子どもがいて、それぞれにやりたいことをやらせてあげたいと思う親の気持ちを感じた。何をやるにもお金が必要で、それがなければ、不自由な思いをさせてしまう。それが心配だから、生命保険に入るのだということが最大の理由であった。

二つ目には、老後の生活資金など将来必要となるお金を、必要な時期や目的に合わせて準備する手段として利用することである。定年は六十五歳となる風潮にあるが、平均寿命は男性は八十一・四一歳、女性は八十七・四五歳であり、健康寿命は男性が七十二・六八歳、女性が七十五・三八歳だと、厚生労働省が

令和元年の値を示している。この調査からも分かるように、約十年間は介護が必要な状態になる可能性が高い。この介護にはお金が必要であるため、その準備として生命保険に加入しているそうである。

私たち中学生には、〝高齢化社会〟といってもピンとこないが、親世代にとっては、身近な問題で、必要な費用についても心配な材料となっていることが分かった。

「老後なんてまだまだ先やん。」

と私が言うと、

「あっという間にそのときは来て、そのときに子どもたちに迷惑はかけないからね。」

と、にこやかに話してくれた。大人になるとは、将来について不安な材料を除くために行動することでもあるんだなと感じた。

私は生命保険について考えることが今までなかった。生命保険は〝もしも〟の備えであることは、なんとなくは分かっていたが、親がその備えをしていることで身近に感じることができ、また自分を大切に思ってくれていることも分かった。少し嬉しかった。私の未来を考え資金面も心配して準備してくれている両親の思いに気付く、よいきっかけとなった。

私に今できることは、何でも一生懸命頑張って中学生にしかできない毎日を送ることである。ケガや交通事故等に気を付けながら、健康で幸せな毎日を送りたい。私を思ってくれている家族とともに。